

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370288

研究課題名(和文) 英国歴史小説の射程 スコット『ウェイヴァリー叢書』の越境・変容と文化的交渉

研究課題名(英文) The Reception and Transformation of Walter Scott's Waverley Novels: the Historical Novel's Cultural Role and Significance in the Victorian Period

研究代表者

松井 優子 (MATSUI, Yuko)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：70265445

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、新歴史主義的観点から、19世紀の作家ウォルター・スコットの歴史小説群『ウェイヴァリー叢書』とヴィクトリア時代ブリテンの知的・文化的関心との応答について考察した。特に、豪華版から廉価版まで各種エディションの出版の実態やその背景と思われる知的基盤、初等教育用の主要な教科書版でのスコット作品の提示方法やその趣旨、風景画集や逸話集など派生的出版物や派生現象が前景化するスコットの小説技法や歴史小説のジャンルの特徴を軸に分析し、19世紀における『叢書』の文化的役割や意義について検証を進めた。

研究成果の概要(英文)：This study examined the Victorian reception of Walter Scott's Waverley novels and explored the cultural role of the historical novel in the 19th-century Britain. It first demonstrated the ubiquity of Scott's works in Victorian society by listing the collected editions of the Waverley novels. Their paratexts such as lists of events and characters were also considered in terms of the educational value of the historical novel. The pedagogical usefulness of the genre is further explored through the analysis of the prevailing use of Scott materials in Victorian school texts. The limited number of the works chosen for class study as well as 'unliterary' assignments attached to the text explains negative perceptions of Scott's works during later periods. The formal closeness of history textbooks to the historical novel could similarly undermine the genre's literary value. Meanwhile, Scott literary tourism well illustrates the generic feature and cultural force of the historical novel.

研究分野：英文学

キーワード：英文学 歴史小説 文化史 ウォルター・スコット

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の開始当初の背景としては、まず、ウォルター・スコット (Walter Scott, 1771-1832) の歴史小説全集『ウェイヴァリー叢書』(The Waverley Novels) が、ほぼ60年ぶりに「エディンバラ」版 (The Edinburgh Edition of the Waverley Novels, 1993-2009) として再刊されたのにもない、近年、スコット研究の発展・多様化が進み、そのなかで、スコット作品の再評価やさらなる理解に不可欠な要素として、19世紀における受容の分析に焦点が当てられるようになってきたこと、および、この視点を補完するものとして、19世紀出版史研究の進展が挙げられる。

従来、スコットや彼の歴史小説群については、ロマン主義時代を中心に、絶大な文化的影響力が示唆されてはいたものの、その具体的な検証には乏しく、また、20世紀後半以降は、英文学の正典としての位置づけからはずされたこともあり、作品の再刊や研究も活況を呈しているとは言えなかった。そこに、20世紀後半におけるスコットの初版校正原稿の発見を機に、綿密な校訂作業と詳細な注釈を備えた上記「エディンバラ」版が企画、出版されたことで、スコットの意識的な小説技法に批評的関心が集まる。これを受けて、ロマン主義時代のジャンルの多様性や小説の発展という同時代の文脈においてスコットの歴史小説群を分析したり、あるいは、逆に普遍的な視点から、従来見逃されてきたスコット作品の鋭い言語意識や現代的意義の再認識を促す研究成果が蓄積されていった。

こうしたスコット再評価の高まりや多様化は、翻って『ウェイヴァリー叢書』が多大な文化的影響力を行使していた19世紀における受容の実態を検証する意義につながっていく。それは、読者や読書習慣に力点を置く近年の批評動向とも呼応している。そうした動向と連動しつつ、近年、ブリテンにおける出版史に関する研究書が相次いで出版され、種々の『ウェイヴァリー叢書』出版の文脈を検討する重要な情報に加え、19世紀の小説出版におけるスコット作品の役割について貴重な洞察を提供することになった。

これまで、19世紀における「スコット人気」は言わば自明の事実として、あるいは20世紀においてはむしろ退けられるべきものとして、その実態が具体的、あるいは詳細に検討されることは少なかった。けれども、上述の、多様な観点からスコット作品の再評価を試み、その文学的・文化的役割への再認識を促す動きは、ロマン主義時代からヴィクトリア時代における『ウェイヴァリー叢書』の普及の状況を具体的に解明し、その文化的意義を検証する重要性を示唆している。あわせて、その意義や役割を歴史小説のジャンルの特性との観点から考察することで、歴史小説研究の射程の拡大にもつながると思われる。

## 2. 研究の目的

本研究は、新歴史主義的観点から、ロマン主義時代を代表するウォルター・スコットの歴史小説群『ウェイヴァリー叢書』とヴィクトリア時代ブリテンの知的・文化的関心との応答について考察し、19世紀におけるスコット受容の具体的な把握や検証をおこなうことをめざしている。なかでも、19世紀後半にこの『叢書』が世代や媒体を越えて遍在・変容していた実態をふまえて、豪華版から最廉価版まで各種全集版の出版やその知的基盤、教科書版での作品の改編やその趣旨、手引書や画集など派生的作品や現象が前景化する作品観や小説技法等を分析の軸とする。これら当時の多様な文化的交渉の考察を通じて、19世紀において歴史小説がそのジャンルの特性ゆえに担うことになった文学的・文化的役割について検証を進め、従来の英国小説・文化史の接続かつ再編制を促す新たな視座の導入に資することを目的に遂行されたものである。

## 3. 研究の方法

19世紀における『ウェイヴァリー叢書』の普及はきわめて多様にして広範囲におよぶが、本研究では大きく分けて、まず、考察の土台として、19世紀における『ウェイヴァリー叢書』の多様なエディションの出版の整理、次に、歴史小説の特性が焦点化される場として、19世紀末の教科書版での作品選択や改編と同時代の教育的要請との連携の考察、および、当時の日常生活への普及・浸透が観察できる場として、派生的出版物や派生現象の分析という三つの視点からのアプローチを通して、その普及の実態の具体的な把握を試みた。いずれも、先行研究の参照に加え、各エディションや出版物の特定やリスト化という基礎的作業から始める必要があり、大英図書館、スコットランド国立図書館、オックスフォード大学ボドリアン図書館、アバディーン大学図書館等で各エディションの閲覧や、教科書版や派生的出版物の調査・収集、および、それらの分類・整理をおこなった。

あわせて、『叢書』の各エディションの出版実態や教科書版等での改編をめぐる分析について、国際学会にて研究発表をおこない、その後の質疑応答や関連のセッションでの議論やスコット研究者との意見交換を通じて論の検証や関連情報の収集を進めた。また、国内の学会では、他の地域や作家、歴史学の分野と比較・検討する貴重な機会として、関連のシンポジウムに参加し、スコット作品の派生的出版物や受容の考察の幅広い検証に努めた。

## 4. 研究成果

(1) 19世紀における『ウェイヴァリー叢書』の各エディション出版状況の把握や整理については、大英図書館を中心に数回にわたって文献調査を実施し、資料の収集、分析をおこなった。あわせて、『叢書』出版の全般的

な傾向や、パラテキストを含め、主要エディションの特徴について整理し、19世紀『叢書』の文化的役割について検討した。

19世紀から20世紀にかけてのブリテンにおける『ウェイヴァリー叢書』出版については、大きく四期、つまり、まず、スコットによる歴史小説第一作である『ウェイヴァリー (Waverley, 1814)』の出版から「大全集」(Magnum Opus)版が完結する1814年～1833年まで、次に、スコット生誕から百年が経過し、著作権が徐々に消滅し始める1833年～1871年あたりまで、次いで、没後百年となる1932年まで、そして、1933年から「エディンバラ」版が出版される1993年までに分類することができる。このうち、1833年までは、作者スコットが出版に直接かわり、新刊小説や復刊において挿絵を入れたり、三巻本31シリング6ペンスの価格で売り出すかわらで、愛蔵版を出したりと、新機軸を次々と打ち出した時期にあたる。その集大成となったのが、1829年から月刊分冊の形式で一冊5ペンスで出版された廉価版の「大全集」版全48巻だった。当時のブリテンの印刷、製紙技術の申し子のようなこの全集には、国王ジョージ四世への献辞が踊り、『ウェイヴァリー叢書』とこれに接した経験や記憶が、ナショナルな読者の共同体の形成にも関与した可能性がうかがわれる。

スコットの没後、1833年～1871年までは、ブリテンにおいては、最初はスコットと生前かわりかかわりのあったキャデル社、のちにはキャデル社から著作権を引き継いだA&C・ブラック社がほぼ独占する形で、『叢書』出版が進められた。愛蔵版の「アボッツフォード」版(Abbotsford Edition, 1842-47)、「図書館」版(Library Edition, 1852-53)、「安価な」版(Railway Edition, 1854)、「6ペンス」(Sixpenny Edition, 1866-68)版など、読み手の階級や読まれる場に対応した、じつに多様なエディションが生み出された時期にあたる。

これら版型や価格の多様化とあわせて注目されるのは、新たな改訂作業を施すとともに作家が遺していた注釈を追加して1870～71年に出版された「百周年」版(Centenary Edition)での試みである。ひとつには、これがスコット生誕百年を記念した出版事業であり、その意図や経緯自体が19世紀ブリテン、ひいてはヨーロッパにおける文学者、とくに小説家の地位の向上や文化的役割の重要性を示唆している。加えて、『叢書』鑑賞・読解用のパラテキストとして、その各巻巻末には語彙集と事項作品が、そして、最終巻には語彙集、作品の舞台となった時代と場所の一览、および、事項や人名が登場する巻を参照するための総索引が添えられていることである。これらを通して、まずは、登場人物の多さに加え、作中の歴史的事件や人物、建築、動植物にいたるまで、それぞれに政治的、伝記的背景や建築様式、原産地や性格な

ど、まさに「百科事典」的な詳細な説明を添える『叢書』の特徴が浮き彫りになっている。あわせて、こうした「索引」の存在は、膨大な情報の集積でもある『叢書』を読んで楽しむだけでなく、あたかも実際に百科事典であるかのように、教養や知の情報源として、「引いて、使った」読み手の存在をも想起させる。これらのパラテキストは、『叢書』が史実とフィクションとの混淆という歴史小説としてのジャンルの特性ゆえに、当時の文化的・知的欲求に応じる回路として機能していた可能性を示唆している点で、後述の(2)での学校教科書における『ウェイヴァリー叢書』への展開を予期させる。

この「百周年」版前後、段階的な著作権の消滅を境に、『叢書』出版は、キャデル社やA&C・ブラック社による独占状態から、各出版社によるさらに多様で数多くのエディションが競合する時代となる。この時期、「挿絵」としての写真の導入や装丁での差別化、あるいは学校版といった特定の用途に特化したエディションに加え、特に注目されるのは、低価格化の進行とそれともなう労働者読者層への普及である。たとえば、1870年から32頁ずつ週刊1ペニーで売り出された「民衆」版(People's Edition)では、序で「労働者の幸福と向上」への貢献を謳うとともに、植民地やアメリカ合衆国に低価格をアピールしていた。さらに、1873年からは「ディックス」版(Dick's Edition)が登場し、月刊一冊一作品3ペンスで販売されている。すでに広範な読者層に浸透していたスコット作品だが、ここにいたり、社会の全階層の読み手、そしてブリテンのみならず植民地や大西洋をはさんだ合衆国にまで普及しうる状態になったことになる。

上でみてきたような、19世紀における「図書館」版や「鉄道」版、「学校」版といった名称や、語彙集、索引の存在は、『叢書』が娯楽や知識の習得といった、当時の読み手の多様な文化的・知的欲求に対応していたことをうかがわせる。なかでも、一方で豪華愛蔵版の出版が続いていたとはいえ、労働者階級にとっての娯楽だけでなく「教材」としても廉価版が読まれていたことは、初版時の受容のありよう、つまり、高価格で出版され、『エディンバラ・レビュー』等の書評の対象となり、そこで文学における想像力や情景描写等が論じられていた状況とは対極に位置する。その点で、その後の『叢書』受容を方向づける現象として重要と考えられる。

というのも、こうした活発で多様な『叢書』出版は、1932年の没後百周年記念版の出版を境に、1993年に「エディンバラ」版が出版されるまで長い空白期に陥ることになるからである。戦間期に、従来の版の印刷に用いられたステロ版が供出、融解され、再版の物質的基盤が失われたことも大きいとはいえ、上記のような出版状況を把握したうえであらためてこの空白期に目を向けると、その差は

いっそう際立ってくる。19世紀末には英語圏にまさに遍在していた『叢書』の事実上の抹消、あるいはそうした事実そのものの忘却状態は、単に「大衆的人気の凋落」や「時の試練」という説明に終わらず、むしろそれ自体考察に値するひとつの重要な現象として、一個の文化的、文学的役割をもっていたととらえるべきだろう。

以上を通じ、19世紀における『ウェイヴァリー叢書』出版の実態について、その全体的傾向や主要な特徴を中心に、一定の理解を得ることができた。一方、その過程で、19世紀における出版事情や『叢書』出版の多様性ゆえに、その全貌を把握するのは至難の業に近いことも明らかになった。特に廉価版の場合、資料として図書館に所蔵されることもないままに廃棄され、全巻の閲覧は困難なエディションも存在する。また、今回の調査を通じ、合衆国でのいわゆる「海賊版」の出版をふくめ、ブリテン外での出版も視野に入れると、その把握の難しさがいや増すこともあらためて確認された。とはいえ、異なる階層に加え、ヨーロッパや英語圏、あるいは植民地での作品の普及が、19世紀のスコット受容について考える際のきわめて重要な側面でもあることは、以下の(2)や(3)での分析からも推察される。こうした、全体的な傾向の把握や焦点を絞った分析によって細かな実態の究明を補う必要性とともに、19世紀英語圏やヨーロッパにおけるスコット受容を検証する重要性が再認識されたことも、今回の調査の成果として挙げられる。

(2)上でみたような『ウェイヴァリー叢書』の遍在をさらに加速させると同時に、『叢書』をめぐる知的・文化的要請が最も顕在化し、かつそれによってスコット作品が特定の受容へと強く方向づけられている場として、19世紀末のブリテンにおける学校教科書、特に初等教育用読本におけるスコット作品の使用が挙げられる。

上述の「百周年」版で指摘した語彙集や索引といった『叢書』読解用のパラテキストは、独立して出版されると、19世紀後半から実際に存在していた『叢書』関連の手引書や解説書といった形をとることになるだろう。これら自体、教育現場での活用を連想させる出版物だが、事実、特に1870年と1872年の普通教育法施行以降、スコット作品はウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)とならび、ネルソン(Nelson)社の『新ロイヤル読本』(*The New Royal Readers*)やロングマン(Longman)社の『シップ文学読本』(*'Ship' Literary Readers*)、チェインバーズ(Chambers)社の『国民読本』(*National Reading Books*)をはじめとする主要な学校教科書用の中心的題材として使用されることになった。

これら学校教科書、特に初等教育用読本でのスコット作品の選択には一定の傾向がみ

られ、長編物語詩の場合は『マーミオン』(*Marmion*, 1808)と『湖上の美人』(*The Lady of the Lake*, 1810)、小説では『アイヴァンホウ』(*Ivanhoe*, 1819)、『ケニルワース』(*Kenilworth*, 1821)を筆頭に、中世を題材とした作品が取り上げられていることが多い。これを、「大全集」版スコット全集からの抜粋で構成された19世紀半ばのこども向け贈呈本と比べてみると、その特徴がいっそう浮き彫りになる。後者が、教育的要素は備えながらも、全著作からバランスよく抜き出し、あくまでも作家スコットやその作品の全体像を伝えようとしているのに対し、教科書版では、地図や解説、抜粋部分にかかわる設問が添えられて地理や歴史といった特定の科目への焦点化が観察されると同時に、中世以外を扱った作品の採用は限られ、特定のネイションや帝国のアイデンティティ形成に資する作品選択となっている。

こうした読本では、作品からの特定の場面の抜粋(たとえば、『ケニルワース』の場合なら、サー・ウォルター・ローリーのマントをめぐるエピソードが好んで選ばれている)が数章を構成していることが多いが、ネルソンの『新ロイヤル読本』第六学年用のように、『アイヴァンホウ』全篇の要約が読本全体に分割されて配置されている例もみられる。いずれの場合も、これら抜粋ないし要約に添えられた設問や課題には作品の創造的解釈にかかわるものは少なく、そのほとんどが地理や歴史の知識、あるいは英語の語彙力や文章力の向上に関係したものになっている。そもそも歴史小説には、背景となる時代や事件について一定程度の知識を必要とするというジャンルの特徴があるが、特に『叢書』では、先の(1)での事項索引等の存在も示していたように歴史的事件や人物の背景が詳述されている。歴史小説特有のこうした特徴も、スコット作品が教材として選ばれる背景のひとつにあったと思われる。

さらに、1870年代から80年代にかけての『新ロイヤル読本』第五学年用の「偉人伝」(*'Lives of Great Men'*)というセクションも注目に値する。ここでは、アルフレッド大王、提督ホレイショ・ネルソン、合衆国初代大統領ジョージ・ワシントン、ナポレオン・ボナパルトらとならんで、シェイクスピア、詩人ジョン・ミルトン(John Milton, 1608-74)、それにスコットが挙げられている。政治的、軍事的指導者とならんで、作家が名を連ねていることは、19世紀ブリテンにおける文学者の公的、指導的役割に目を向けさせる。と同時に、詩人たちとともに小説家スコットの名があることは、歴史という「権威」ある領域と隣接する歴史小説が、小説の文学的地位を向上させた事実をあらためて想起させつつ、「正典」としての位置づけを示唆している。

その一方、先に(1)で確認した多様なエディションのなかには、この歴史、ないし歴

史学との隣接が、歴史小説作家スコットにとってはたして肯定的な影響のみにとどまったのかを問いかけるようなエディションも存在する。学校教科書も出版していたマーカス・ウォード (Marcus Ward) 社によって 1877 年から 79 年にかけて出されたもので、この「マーカス・ウォード」版の挿絵は、同じ出版社による歴史用学校教科書と酷似し、隣接する両領域の境界が曖昧になっている印象を強く与える。この時期、こども向けに出版されたスコット作品からの豪華版抜粋集には成績優秀者を表彰する際の賞品としての需要も多かったが、そうした出版物のなかには、文学鑑賞よりもむしろ歴史的知識の習得を意図しているように思われるものも存在する。それらは、かつて歴史小説における歴史との隣接が小説の文学的地位の向上に資したとすれば、今度は逆にその近似性が歴史小説の創造性や文学性を脅かしかねない可能性をも示唆しているようである。

このように、19 世紀末ブリテンにおいては、スコットの歴史小説が一定の作品や登場人物の特権化を経て、また、特定の教科の知識習得という実的要請に応じつつ、初等教育用学校教科書という公的な回路を通してナショナルな文化や帝國的知の導入の具へと接続・変換され、その受容に公的かつ限定的な性格が賦与されることになった。それは、歴史小説という文学と歴史との境界領域に位置するジャンルならでは果たし得た役割でもあった。その一方で、「こども」の「知識向上」という特定の目的に奉仕させられることは、たとえ実際の教科書の活用にあたっては現場の教員による自由や多様性が存在したとしても、文学作品として史実から創造的に逸脱する自由や、それにもとづく解釈の多様性を制限されることになりかねない。それを考えると、「娯楽」よりもむしろ「教育」との連携がスコット作品の文学性、ないし「非文学性」の認識に与えた影響は無視できないように思われる。

あわせて、これら初等教育用教科書の調査を通じて、これらの教科書がブリテンのみならず、植民地でも活用されていたことも明らかになった。つまり、こうした教科書が形成していた 19 世末の一個の文化圏やアイデンティティにおいて、スコットやその作品が大きな役割を演じていたことになる。また、この時期、スコット作品は、初等のみならず、高等教育用教科書や英文学の手引書にも採用されたほか、特定の作品の解説書やテキスト版が多数出版されてもいた。それらにおける作品選択や作品鑑賞の方向性が初等教育用教科書の路線を強化するものなのか、それともそれを相対化する視点から編まれているのか、教育現場におけるスコットとその作品についてはさらなる検証が求められる。

(3) 19 世紀ブリテンにおける『ウェイヴァリー叢書』の遍在や変容は、これら多様な

エディションや教科書だけでなく、画集や逸話集をはじめ、余暇や娯楽と結びつき、日常生活の隅々に浸透していた多くの派生的出版物や派生現象という形でもみられた。それらは、スコットの歴史小説の特徴を理解する手がかりを提供する一方で、近代的文学受容の先駆的な例も提示している。

上でみてきたような広範な読者に『ウェイヴァリー叢書』が受け入れられたのには、作品が提示し、期待する主体的、能動的な読者像とも関係している。スコット作品は序や後書きでそうした読書モデルを自ら提示するほか、作品自体、作者、登場人物、読者が参与、構築するライブ空間として機能している。また、現実の時代や土地を舞台としつつ、過去を想像的に再構築する文学的営みのなかで、稿本や判例集、新聞記事、絵画や墓碑銘、伝説といった多様な媒体を巧みに利用したことも、読者を作品世界に積極的に関与させる有効な要素になったと思われる。

スコットの作品世界を具体化する試みは、作品の舞台を描いた風景画集や写真集、登場人物の挿絵集、モデルとなった事件や人物にまつわる逸話集や解説集の出版となってあらわれた。あるいは、作品の抜粋を集めた箴言集やバースデー・ブック等では、作品の通読や鑑賞とはちがった形で読み手の人生そのものに直接かかわることを通じ、逆に作品が現実世界に組み込まれるのを助けている。

19 世紀に盛んに行われたスコット作品をめぐる文学観光は、このような、歴史小説における史実と虚構との混淆が読み手の想像力や能動性を誘発し、作品が読み手の生きた経験の一部となる重要な派生現象のひとつとして考えられる。ここでは、作品の舞台であるトロサックス地方やボーダーズ地方、作家の居所アボッツフォード、作家の墓のあるドライバラ寺院、および作家の記念碑、という、文学観光における四大「聖地」が網羅され、それらを結ぶ鉄道路線には「ウェイヴァリー・ルート (Waverley Route)」という名称が与えられた。これらを巡るツアーも企画されたが、その参加者には教師や牧師が名を連ね、先にみた『叢書』の教育的要素や小説の地位向上との関連もみてとれる。

(1) でみた様々なエディションのなかで、ブラック社による、作家ゆかりの品を描いた挿絵を多数増補した「アボッツフォード」版や種々の「鉄道」版はこうした文学観光との連携という点でも重要だが、ブラッドベリー・アグニュー (Bradbury, Agnew & Co.) 社によって 1870 年代に出版された「ハンディ」( ' Handy Volume Waverley ' ) 版の場合、その裏表紙で、小型、軽量、読みやすさを謳っている。事実、現代のペーパーバックや文庫判よりふたまわりは小さく、旅行での携帯、参照に適していたことが推察される。

加えて、たとえ作品そのものを携行していなくても、多くの旅行ガイドが作品からの長文の抜粋を掲載し、訪れている土地や風景を

スコット作品との関連で鑑賞する有用な手引きとなっていた。なかでも、『叢書』の版權を長く所有していたブラック社や、「ウェイヴァリー・ルート」を運営していた鉄道会社のガイドブックは、作品や註から広範に引用しつつ、文学観光が身体をともなった作品鑑賞や批評の場であることを示唆すると同時に、旅行行程の説明が作品からの引用に切れ目なくつながり、旅行者をフィクションと現実世界とが渾然一体となった世界へと導いている。あわせて、スコット作品の「聖地巡礼」を記した数々の旅行記の書き手には他の英語圏やヨーロッパからの旅行者の姿も目立ち、スコットやその作品の文化的地位や役割が多国籍の読者に共有されていたことを示している。

このように、スコットとその作品をめぐる文学観光は、『叢書』の各種エディションや派生的出版物の総合的、近代的な享受のありかたとして注目される。一方、20世紀におけるその衰退は、前述の『叢書』出版空白期と重なり、『叢書』受容をめぐる文脈の変化と連動した現象として理解される必要がある。

(4)以上、19世紀ブリテンにおける『ウェイヴァリー叢書』の広範な普及実態やその文化的意義について、各種全集の出版や学校教科書、また、派生的出版物や派生現象の調査・分析を通して一定の検証が得られた。全集のパラテキストや学校教科書が歴史小説の教育的要素を前景化しつつ、当時の知的要請に対応していたとすれば、各種エディションや、風景画集、旅行ガイドといった派生的出版物も、読者による作品世界の具体化を促すとともに、その文化的関心に応答している。また、こうした『叢書』の多様な受容や強い文化的影響力は単にブリテン国内にとどまらず、広くヨーロッパや英語圏、植民地におよんでいたことも調査の過程で少しずつ具体的に明らかになってきた。

これらは、一方では19世紀文学における「正典」としてのスコットやその作品の位置づけを強く示唆している。その点で20世紀以降のスコット受容とは大きく異なり、これについては、先述の高等教育用教科書や英文学入門書等でのさらなる検証や、隣接領域である当時の歴史教科書における歴史叙述とのより詳細な比較・検討が求められるだろう。また、スコット作品をめぐる派生的出版物の全貌の把握自体は困難を極めるとはいえ、目的を特化して出版されたエディションや文学観光関係の出版物は、受容の多様性や近代性、大衆性との関係の考察をより深める資料として特に参照の必要性が高い。そのうえで、20世紀におけるスコット受容空白期を招いた文化的文脈を回復、再検討することは、今後の重要な検討課題になるはずである。19世紀において、階層や国籍を横断する読者層と高い文化的地位を享受していた『ウェイヴァリー叢書』の20世紀における変容の考察は、

特に20世紀前半のブリテンにおける文化や文学の力点の変化や分化、および、それらをめぐる諸戦略における『叢書』の役割を具体的に検証する有効な視点になりうると考えられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

松井優子、「Scott Country と19世紀文学観光の展開」、『第88回大会Proceedings』、日本英文学会、査読無、2016年、77-78頁。

[学会発表](計3件)

松井優子、「Scott Country と19世紀文学観光の展開」、日本英文学会全国大会、2016年5月28日、京都大学(京都府・京都市)。

Yuko MATSUI, 'Scott's Novels in Victorian Schoolbooks', The Tenth International Scott Conference, 2014年7月10日、アバディーン(連合王国)。

Yuko MATSUI, 'Scottish Writing in Recent Japanese Translation', World Congress of Scottish Literatures, 2014年7月6日、グラスゴウ(連合王国)。

[図書](計4件)

松井優子 他、音羽書房鶴見書店、『読者ネットワークの拡大と文学環境の変化 19世紀以降にみる英米出版事情』、2017年、316(43-64)頁。

松井優子 他、ミネルヴァ書房、『旅にとり憑かれたイギリス人 トラヴェルライティングを読む』、2016年、326(89-116)頁。

松井優子 他、音羽書房鶴見書店、『戦争・文学・表象 試される英語圏作家たち』、2015年、335(13-39)頁。

松井優子 他、明石書店、『スコットランドを知るための65章』、2015年、400(211-216)頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

松井優子 (MATSUI, Yuko)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：70265445